翻訳の未来を考える

JTF JOURNAL

JAPAN TRANSLATION FEDERATION

一般社団法人 日本翻訳連盟 機関誌 日本翻訳ジャーナル

2014年3月／4月号
#270

今号の表紙　イプシロンロケット

航空宇宙業界の翻訳需要

JAXA, ANA, エアバス

IJET-25 東京 受付開始

ビジネス急拡大につき
優秀な人材を多数募集中！

・プロジェクトマネージャー
・翻訳マネージャー /
　翻訳コーディネーター / 翻訳者
・ローカリゼーションエンジニア
・QA テスティングエンジニア
・プリセールス
・アカウントマネージャー

詳細は下記 URL をご覧ください。
http://www.sdl.com/jp/about-us/careers/default.asp

SDL Your Content Their Language

十印は、プラスのしるし。

Communications for a global marketplace

十印は2013年3月に創立 50 周年を迎えました。

十印は、ローカリゼーションをはじめとして、翻訳、多言語展開など
お客さまのあらゆるニーズにお応えできるよう
グローバルマーケットを見据えながら
これからも取り組んでまいります。

みなさまのご繁栄に
プラスします。

ローカリゼーション、翻訳サービス、ドキュメンテーションサービス、
システム開発をご提供しています。

十印では、翻訳者・QA チェッカを募集しています。詳しくはご連絡ください。
http://www.to-in.com　Phone: 03-3455-8712

翻訳・ローカリゼーション・
ドキュメンテーションサービス
TOIN
Communications for
a global marketplace

株式会社 十印
〒105-0014　港区芝 1-12-7　芝一丁目ビル
Phone: 03-3455-8711 (代) Fax: 03-3455-8616　http://www.to-in.com

募集中!

営業、コーディネータ、校正スタッフなど、多くの人材を各拠点で募集しております!

言　語	英語・中国語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・イタリア語・ロシア語 韓国語 等(その他言語も募集中)
分　野	特許・工業・医薬・金融・ローカライゼーション
内　容	翻訳者・校正者・メディカルライター・通訳者・ワープロ外注 テープライター 等
応募方法	下記ウェブサイトからご応募下さい

株式会社 翻訳センター JASDAQ 証券コード:2483

大阪 大阪市中央区久太郎町4丁目1番3号 大阪御堂筋ビル13階
TEL:06-6282-5010 E-Mail:info@honyakuctr.co.jp

東京 東京都港区三田3丁目13番12号 三田MTビル8階
TEL:03-6369-9965 E-Mail:freelance@honyakuctr.co.jp

名古屋 名古屋市中村区名駅3丁目16番4号 太陽生命名駅ビル5階
TEL:052-571-2101 E-Mail:nagoya@honyakuctr.co.jp

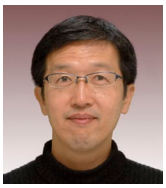
募集要項・会社概要等、詳しくはウェブサイトをご覧下さい http://www.honyakuctr.com/

工業技術や特許分野に強い翻訳会社
英語 中国語 韓国語 ベトナム語 その他

JES技術翻訳
ジェスコーポレーション

JES
“プロ翻訳者”から一段上の
“特許翻訳のエキスパート”へ
通学コース 通信添削コース
JES 技術翻訳学院

MESSAGE FROM THE EDITOR



河野 弘毅（かわの ひろき）
日本翻訳ジャーナル編集長

［世界とたたかい愛される道］

今月号は、「航空宇宙業界の翻訳需要」と題して JAXA、ANA、エアバスジャパンの三社に取材させていただきました。今回の取材でもっとも印象に残ったのは、ANA で人事部・英語サポートセンターの所長を務めておられる御古正彦さんが示された「世界とたたかい、よく知られ、愛される」というグローバルな人間像でした。

これからのビジネスでは世界市場で競争相手とたたかって負けないことが生き残りの条件となるわけですが、「たたかう」といっても戦争という手段をとるわけではなく、自分から世界の相手に対しては「多様な価値観の中でもコミュニケーションをとることができる」「自己の拠り所を自社および自国の文化・風土に置き、良いところを他者に伝えることができる」ことを心がけ（=「よく知られ」）、世界の相手に対応するときには「人種・国籍・性別・年齢・所属等にかかわりなく、多様な価値観を素直に受け入れて尊重する」ことを心がける（=「「愛される」）ことが大切だという理念が、そこには示されています。

よりシンプルに言い換えると、第一に生き残れるために強くあること、第二に他者にわかってもらう努力を惜しまないこと、第三に他者の多様性に対して寛容であること、この三点を兼ね備えたときに人は世界と共存できるというビジョンがここに示されていると思います。

言葉を理解することはこれら三点が成立するための前提条件になりますが、言葉が理解できるだけで自動的に三点が成立するわけではありません。特に「手間がかかっても言葉を通じて自分の国とその文化、自分の立場を理解してもらう努力を積み重ねる」「安易に他者を否定せず、他者を承認することが自分も他者から承認されることにつながると理解して寛容の精神を保つ、そのために相手の言葉をきちんと理解して聞く」という姿勢をともなわないまま競争を繰り広げると、人間は遅かれ早かれ他者の否定や搾取や抹殺に行きついてしまうというのが歴史の教訓ではないでしょうか。

言葉の仕事にたずさわるものとして、提供するサービスとしての言葉がどのように社会で活かされていくのか、産み出された言葉がどのように異なる他者同士の相互理解に役立つのか、常に考える視点を忘れてはならないと思います。

JTF JOURNAL March / April 2014 #270

Contents

JAPAN TRANSLATION FEDERATION

特集：航空宇宙業界の翻訳需要

06 JAXA
08 ANA
09 エアバス・ジャパン

イベント報告

10 第 5 回 JTF 翻訳セミナー●ウレマン・フレッド氏「翻訳の原点を見つめる」
11 第 6 回 JTF 翻訳セミナー●吉川 潔氏「30 年の翻訳体験から語りたいこと」
12 第 4 回 JTF 関西セミナー●新田 順也氏「翻訳業務での Word マクロ活用と Word のチューニング方法」

Tools and Technology

13 新しくなった JTF 日本語スタイルチェッカー●西野 竜太郎

連載コラム

14 翻訳料金と品質の狭間で―ある翻訳チェッカーの悩み●小山 浩二
16 言語が与えてくれる本質への視点●セランド 修子
18 校正刷りの山の中から●伊豆原 弓
20 付加価値としての訳注のススメ●長尾 龍介
22 翻訳・通訳の社会的評価について思うこと●小林 紀元

表紙のことば

イプシロンロケット

イプシロンロケットは 2013 年 9 月に試験 1 号機の打ち上げに成功した JAXA の新しいロケット。高性能と低コストの両立を目指す新時代の固体燃料ロケットと位置付けられている。最大の技術革新として点検の自動化・自律化を実現したことで、打ち上げと運用の大幅な省力化を達成した。M-V ロケットでは 2 ヶ月近くを要した打ち上げ準備期間が 1 週間にまで短縮されている。このイプシロンロケットの打ち上げシステムは「モバイル管制」と名付けられている。

イプシロンロケットは日本経済新聞社が特に優れた新製品・新サービスを毎年一回表彰する「日経優秀製品・サービス賞」の最優秀賞を 2013 年に受賞した。ちなみに、乗り物？つながりとしては JR 九州の「ななつ星 in 九州」とホンダの「フィット ハイブリッド」も同年に同賞を受賞している。

一般社団法人 日本翻訳連盟
〒104-0031
東京都中央区京橋 3-9-2 宝国ビル 7F
TEL. 03-6228-6607　FAX. 03-6228-6604
E-mail. info@jtf.jp　URL. http://www.jtf.jp/

一般社団法人 日本翻訳連盟 機関誌
日本翻訳ジャーナル 2014年3月／4月号 #270
発行人●東 郁男（会長）
編集人●河野 弘毅
PDF版制作●(有)デジタル・ワークス
WEB版制作●ジャーナル編集委員会

無断転用禁止 Copyright©2014 Japan Translation Federation

Interview

JAXA の通訳翻訳需要

インタビュー：岡本 太陽さん（JAXA 宇宙航空研究開発機構 調査国際部 調査分析課）
聞き手：河野 弘毅・ヘンダーソン秀樹（日本翻訳ジャーナル）、取材：2014 年 1 月

GPM 主衛星 フェアリング結合の様子

解説：JAXA について

JAXA（ジャクサ、宇宙航空研究開発機構）は 2003 年 10 月に宇宙科学研究所（ISAS）、航空宇宙技術研究所（NAL）、宇宙開発事業団（NASDA）の 3 つの組織が統合されて誕生した日本の宇宙開発機関で、昨年 10 月に創立 10 周年を迎えた。2013 年 4 月から新たに就任した奥村直樹理事長のもとで 5 カ年にわたる第 3 期中期計画の実施に取り組んでいる。2012 年 7 月に改正された JAXA 法では JAXA は政府全体の宇宙開発利用を技術で支える中核的な実施機関と位置付けられており、内閣府・文部科学省・総務省・経済産業省が所管府省となっている。最近の注目プロジェクトは地球全体の降水マップを三時間ごとに更新できる「空飛ぶ雨量計」（GPM）。JAXA はこの計画で主衛星に搭載される「二周波降水レーダ」（DPR）の開発を担当した。GPM の主衛星は 2014 年 2 月 28 日に H-ⅡA ロケットで種子島宇宙センターから打ち上げられた。

調査国際部について

河野：はじめに岡本さんが担当していらっしゃるお仕事の内容をうかがえますか？

岡本：今私は 10 年目の職員でして、調査国際部というところで 3 年目になります。調査国際部の中には2つ課がありまして､1つは「国際課」もう1つが「調査分析課」という部署になります。今年の 4 月から私は後者の調査分析課にいるのですが、その前に 2 年弱くらい国際課の方にもいました。主に国際課の方が、他の宇宙機関との国際協力を JAXA の窓口として推進するような課になっています。

研究開発の具体的なプロジェクトを国際部自体が持っているわけではないのですが、他の宇宙機関から「私たちはこういう技術・分野に関心があり、日本とも一緒にできないか」というようなお話を色んな機会で受けることがありまして、直接現場同士でつながることももちろんあるのですが、パートナーとなる相手先がなかなかわからないというような時に、私たち国際部を通じてコンタクトをとってきますので、その間をつないで、そういった協力の可能性・ポテンシャルがあるのかなどを社内調整するというのが国際課の仕事の大きな 1 つです。

2 点あるとすれば、もう 1 つは、海外で大きな会議・イベントがあったりだとか、宇宙機関のヘッド同士が定期的にお互いの近況だとか、こうした協力ができないかみたいな意見交換をするためのトップ会談のようなことをやっている国もありまして、そのお膳立てとか、トーキングポイントをまとめたり、それこそ通訳の手配だとか、そういったことを調査国際部の国際課でやっています。この大きな 2 つがあります。

で、調査分析課の方は少し毛色が違うんですけれど、どちらかというと他の宇宙機関が発表するような政策でしたり、具体的なプロジェクトも含めて、そういった動向を常日頃ウォッチしていて、それを社内だとか必要に応じては政府の機関に対して情報提供を行うというようなところが仕事になります。

英樹：それは他の宇宙組織というか、他の国でどういった研究や開発がおこなわれているかということに、常に注意をはらっているということでしょうか。

岡本：おっしゃる通りですね。

河野：それこそ毎日 Web をウォッチングする感じですね。

岡本：そうですね。JAXA の純粋なプロパー職員だけだとなかなか難しいところがあるので、そういったことは色々と外部に委託して協力していただくなどいろいろなやり方をしていますが、仰っていただいたような仕事をやっていますね。

河野：調査国際部は全体で何名くらいになりますか？

岡本：日本にいるメンバーとしましては 20 人弱ですね。22、23 人ですかね。あと駐在事務所がありますので、国際部の管轄にある駐在事務所というと、ワシントンとパリとバンコク、モスクワにもありますね。

河野：調査分析課は小規模という感じになりますか。

岡本：そうですね。分析課のメンバーが 6 人くらいですので、小規模ですね。

河野：これは本筋ではないかもしれないのですが、海外向けの広報というのは、国際課の担当になるのですか？それとも広報部担当になるんですか？

岡本：たぶんですね、そこが JAXA の課題なのかもしれませんが…純粋な所掌でゆうと広報部になるのではないかと思います。しかし、単純に海外向けの広報は日本向けの広報と違う部分があるので、両部が協力して…という体制がふさわしいのかなとは思うんですけれども、なかなか国内の広報で手いっぱいだったりとか、あとは国際課も業務での国際活動で手いっぱいな部分もありまして…うまくカバーできていのるかなというところはあると思います。

河野：なるほど。ありがとうございます。今頂いたお話で仕事のイメージがとてもよくつかめましたので、最初の議題に入っていきたいのですが…JAXA の中でどのような通訳翻訳需要が発生しているかをお伺いできればと思うのですが。

JAXA ではどのような通訳翻訳需要が発生しているか？

岡本：最初に申し上げておくと、調査国際部は先ほど申し上げたような業務をやってるんですけれども、やはり社内全体で通訳・翻訳業務すべてに携わっている訳ではないんですね。どちらかというとプロジェクトに密接したような、それこそ広報であったりだとか、そういった部分というのはなかなか我々はタッチしていないところもありまして…

河野：それは、各現場の者から直接必要に応じて…

続きは WEB へ ▸▸▸

Interview

ANA（全日空）の通訳翻訳需要

インタビュー：御古 正彦さん（人事部 英語サポートセンター 所長 博士（経済学））
森田 交司さん（人事部 英語サポートセンター 業務グループ 主席）
聞き手：河野 弘毅（日本翻訳ジャーナル）、取材：2014 年 2 月

森田 交司さん（左）と御古 正彦さん（右）

――「英語サポートセンター」とはどのような部署ですか？

英語サポートセンターは、それまで ANA の各部門に分散されていた英語対応の機能を集約し、2012 年 7 月に発足した新しい部署です。所長を含め、21 名のスタッフが当センターに所属しています。

――「英語サポートセンター」は ANA グループにおいてどのような役割を担っているのでしょうか？

英語サポートセンターの役割は主に 3 つあります。1 つめはパイロットが国際線乗務時に必要とされる「航空英語証明」（国家ライセンス）の試験代行業務です。2006 年に航空英語証明の制度が発足してから、ANA では「英語室」という部署を作ってこの試験業務を行っていました。その英語室が英語サポートセンターの前進です。

「航空英語証明」の試験代行業務

――「航空英語証明」とはどのような資格ですか？

「航空英語証明」は ICAO（注：世界の民間航空が共通のルールや技術を開発・制定する目的で加盟している組織）が国際線を飛ぶパイロットについて英語能力を証明するように通達をだし、航空法が改正されてできた制度です。国内線のパイロットには不要ですが、国際線を飛ぶパイロットにはこのライセンスが必要です。以前はそのようなライセンスは必要なかったのですが、実際に言葉のトラブルが事故につながる事例があり、再発防止のためにこの制度が設けられました。国家資格ですが、ANA は代行で証明を発行する機関として認定されています。ANA 本社にくわえて ANA グループの各航空会社に対して試験を行う他、航空自衛隊からも試験の受託を受けています。

続きは WEB へ ▸▸▸

解説：全日空空輸株式会社（ANA）について

ANA グループの持株会社である ANA ホールディングスの連結従業員数は 33,467 人（2013 年 9 月 30 日現在）。このうち全日本空輸株式会社の従業員数は 13,731 人（2013 年 3 月 31 日現在）。「フルサービスキャリア」である全日本空輸に加えて、LCC のバニラ・エアと Peach Aviation を傘下に持つ。連結売上高は約 1 兆 5 千億円。

Interview

エアバス・ジャパンの通訳翻訳需要

インタビュー：野坂 孝博さん（エアバス・ジャパン株式会社 日本担当コミュニケーション・ディレクター）
聞き手：河野 弘毅（日本翻訳ジャーナル）、取材：2014 年 1 月

――野坂さんの担当業務について教えてください。

エアバスの日本における広報宣伝（パブリック・リレーションズ）を中心としたコミュニケーション活動全般を担当しています。

――エアバス・ジャパンではどのような通訳翻訳需要が発生していますか？

翻訳については、われわれの業務の中で一番多いのはプレスリリースです。ばらつきはありますが、多い時は 1 日 1 本、少ないときでも一週間に 2-3 本のプレスリリースを翻訳します。量的には 1 ページくらい、500words 弱くらいです。言語方向は英語から日本語です。

――英語なんですね？

プレスリリースは通常は英語です。本社で使っている言語は仏語・独語・スペイン語・英語の 4 カ国語ですが、これはエアバスの主要拠点の言語を反映したものです。4 ヶ国語すべてでリリースされる場合もありますが、通常は英語が先に出来上がっているので、英語をベースにして日本語版を作成する作業になります。

――社内のコミュニケーションも英語で統一されているのですか？

外国からの参加者が一名でも加わっている場合は確実に英語ですね。

――フランスの本社ではフランス語を使いますか？

いえ、どこであっても、他言語のスピーカーが一人でも入れば英語がベースになります。

続きは WEB へ ▸▸▸

解説：エアバスについて

エアバスは民間航空機市場を代表する航空機メーカー。本社をフランスに置き、アメリカのボーイングと世界市場を二分している。これまでに世界各国のエアラインから合計 13,600 機以上を受注し、8,100 機以上を納入。最近では従来機と比較して 1 座席あたりの燃費を最大 25% 向上させた最新鋭中型機 A350XWB を開発。日本のエアラインとしては、ANA、JAL、スターフライヤー、スカイマーク、Peach、バニラエアの各社がエアバスの機体を運行している。

FRED Uleman

2013 年度第 5 回 JTF 翻訳セミナー報告

ウレマン・フレッド
LLP ジャパン・リサーチ
代表

＊＊

2013 年度第 5 回 JTF 翻訳セミナー
2013 年 12 月 17 日（火）14:00 ～ 16:40
【開催場所】剛堂会館
【テーマ】「翻訳の原点を見つめる」
【講　師】ウレマン・フレッド（Fred Uleman）氏　LLP ジャパン・リサーチ代表
【報告者】津田 美貴　個人翻訳者

＊＊

今回の講師はウレマン・フレッド（Fred Uleman）氏。お名前からわかるように米国出身の英語ネイティブである。本セミナーでは、英語ネイティブの立場から日英翻訳に関する考え方と日英翻訳のコツについてお話くださった。

目的の明確化

「翻訳者とはいったい何だろう？」「翻訳の目的は？」と質問されたら皆さんはなんと答えるだろうか？私の考えでは翻訳者とは、物を書いている人と読んでいる人をつなぐ者だと思っている。つまり→（矢印）のようなものだ。自分が読みたいと思う原稿であれば、勉強にもなる。やりたいことをやりながらお金がもらえる、いい仕事だと個人的には思っている。

だが、プロ野球選手ならスプリングキャンプがあり、五輪アスリートならば強化合宿があり、俳優ならば監督が指導するが、翻訳者はそれさえほとんどない。顧客は指導せず、使い者にならなければ即クビを切る世界でもある。どうすれば翻訳者は自ら初心に戻り自発的に自身のスキルを維持・向上できるか。社内翻訳者でもフリー翻訳者でも、初心者でもベテランでもこれは共通の課題であり共通の答えがある。

単語より複語

よく、翻訳は単なる単語の置き換えと思われているが、そうではない。たとえば、bird は鳥、dog は犬だが、bird dog は鳥犬だろうか？正解は猟犬である。他にも my brother を兄弟と訳す人が多いが、兄弟なら 2 人いるので my brothers と複数形になっているはず。なので、この場合は弟または兄のどちらかである。ほかにも、Dear John なら親愛なるジョンでいいのだろうか？実は Dear John letter はお別れの手紙である。

このように通り一遍の訳し方では NG で、誤訳につながってしまう。単語や連語の訳し方はすべて文脈によって判断しなくてはならない “It All Depends On The Context”（IADOTC）である。訳そうとするより意味は何かを考えるのが翻訳である。言葉ではなく内容を訳すということだ。だから、ある程度意訳しても OK なのである。

最近なんでも英語をそのままカタカナに置き換える訳を多く見かけるが、あれはいかがなものだろうか？日本語に訳してはダメなのか？と思うことがしばしばある。たとえば、映画のタイトル「007 は二度死ぬ」。この原題は You Only Live Twice なので、死ぬなどどこにも書いていない。そういう意味では原文から離れている。

続きは WEB へ ▸▸▸

吉川 潔
特許翻訳者

KIKKAWA Kiyoshi

2013 年度第 6 回 JTF 翻訳セミナー報告

＊＊

2013 年度第 6 回 JTF 翻訳セミナー
2014 年 1 月 22 日（水）14:00 ～ 16:40
【開催場所】剛堂会館
【テーマ】「30 年の翻訳体験から語りたいことと、市販の翻訳ソフトの試訳結果の説明」
【講　師】吉川 潔氏　特許翻訳者

＊＊

今回の講師は吉川潔氏。会社勤務後に、30 年前に翻訳者として独立。70 歳の今も特許翻訳者として活動中。30 年にわたる翻訳人生を振り返って、地方で在宅で翻訳しながら人並みの収入を得る方法と市販の翻訳ソフトの試訳結果について、話してくださった。

概要

翻訳を始めた当初、原子力発電の資料やコンピューターの取扱説明書の和訳を行っていたが、訳文が堅苦しく取扱説明書に不向きと言われ発注停止になり翻訳生活が苦境に陥った。しかし、捨てる神あれば拾う神ありで、別の会社から特許明細書の翻訳を承り、その指導を受けながら仕事を受注し、現在は特許明細書の英訳がほぼ 100% である。

翻訳会社に英訳の評価を尋ねたら「英語になっていれば OK」という返答だった。具体的には、訳抜けがなく、参照数字のミス、誤字脱字、不備な修飾関係、単数と複数の区別、原稿に未記載な事項を含めた原稿の不備なところを修正して英訳してあれば良い、即ち、最低限度の日日翻訳で OK という返答だった。

日日翻訳（？）

日日翻訳とは、欠陥のある日本語原稿を正しい日本語原稿に訂正してから英訳し、それをコメントに記して納入し、クライアントのチェックを簡単にするという意味である。

例えば誤記。原稿に「事故は自動車の加速度のために発生」とあったら、「過速度」の誤記と気付き over speed と訳出できるかということである。

「サンプル A とサンプル B の直径は、サンプル C の直径と同じ」という文章があった場合、皆さんはどのように解釈するだろうか？ ①サンプル A の直径＝サンプル B の直径＝サンプル C の直径、②サンプル A の直径＋サンプル B の直径＝サンプル C の直径。この原文ではどちらの意味にも取れる。前後の文章や図面を参照し、必要事項を補充して正確に英訳する必要がある。

日本人は単数と複数の区別に鈍感だが、アングロサクソンは敏感という点も注意する必要がある。例えば「プログラムは、コマンドを有する複数のメニューを含んでいる」は、（複数のメニューが一つのコマンドを有する（プログラムには一つのコマンドだけ存在））か、（プログラムは、複数のメニューを含んでいて、各メニューが一つのコマンドを有する）か不明であるが、後者（下記の英文）が普通である。

A program includes a plurality of menus each having a command.

続きは WEB へ ▸▸▸

NITTA Junya

2013 年度第 4 回 JTF 関西セミナー報告

新田 順也
エヌ・アイ・ティー（株）
代表取締役

＊＊

2013 年度第 4 回 JTF 関西セミナー
2014 年 1 月 24 日（金）14:00 ～ 17:00
【開催場所】大阪大学中之島センター
【テーマ】「2 秒×1000 回＝30 分のなぞ
　　―翻訳業務での Word マクロ活用と Word のチューニング方法―」
【講　師】新田 順也氏　エヌ・アイ・ティー（株）代表取締役／
　　ブログ「みんなのワードマクロ」管理人
【報告者】平野 陽司　（株）トランスワード

＊＊

「翻訳業務での Word マクロ活用と Word のチューニング方法」をテーマに、2013 年度第 4 回目の JTF 関西セミナーが開催された。講師は翻訳者兼ソフトウェア開発者としてご活躍されている、エヌ・アイ・ティー株式会社代表の新田順也氏。事前アンケートでは、Word マクロを使用したことがないとの回答が 6 割以上だったとのこと。100 名の定員が満席となったことから、このテーマに関する関心の高さがうかがえる。

セミナーは 3 部構成で、第 1 部はマクロを使ったおよびマクロを使うコツ、第 2 部ではセミナー後にダウンロード形式で配布されるマクロのセットアップおよび使用方法の説明、第 3 部では配布されるマクロ以外の翻訳支援のデモンストレーションである。各々が実際に翻訳作業をするうえで必要となるツールは、様々な条件によって大きく変わる。Word マクロは、様々な翻訳支援ツールのなかから自分に合ったツールを選ぶ際の選択肢の 1 つにすぎないという前提でセミナーを進める旨が明示される。「翻訳にワードマクロを使っている自分を妄想してワクワクする」をゴールに掲げ、第 1 部に入る。

第 1 部 Word マクロの紹介

初めに Word マクロのイメージを掴むためのデモとして、配布されるマクロ集に収録されている一部を実行。「書式なしでテキストとして貼り付け」、「上下・左右の余白や 1 ページあたりの行数の調整」、「選択した用語を指定の辞書サイトで検索する」などのマクロを次々と、ツールバーのボタンもしくはショートカットキーを 1 度押すだけで実行する。

Word マクロとは、自動で翻訳をするツールではない。あくまでも翻訳支援の道具であり、Word を翻訳マシンにチューニングするためのツールである。通常の操作では 3 ないし 4 クリック程度必要なものを効率的に行えるようにするためのものである。例としては、ブラウザに表示された情報をコピーして Word に貼り付けようとした場合に、書式情報なしで貼り付けをしたいため、「形式を選択して貼り付け」をする必要がある。Word 2007 ではその操作をするのに 3 クリック要する。この程度の操作に要する時間が 2 秒程度、一般の翻訳作業においてこの程度の操作を 1 分間に 2 回しているとした場合、1 時間では 120 回、1 日ではおよそ 1000 回程度、時間にして 30 分ぐらいを費やしている可能性がある。

続きは WEB へ ▸▸▸

JTF 日本語スタイルチェッカーが新しくなりました

西野 竜太郎（にしの りゅうたろう）

JTF 日本語スタイルチェッカーが新しくなりました。今回の更新で、⑴常用漢字であることをチェックする機能と、⑵原則として使用しない記号やかっこをオプションでチェックする機能が追加されました。またデザインも新しくなっています。本チェッカーのウェブサイトはこちら：http://www.jtf.jp/jp/style_guide/jtfstylechecker.html

そもそも JTF 日本語スタイルチェッカーって？

あるテキストが「JTF 日本語標準スタイルガイド」に準拠しているかどうかを確認できるツールです。2012 年に JTF 標準スタイルガイド検討委員会から公開されました。ウェブ・ブラウザー上で動作するため、新たなソフトウェアをパソコンにインストールすることなく手軽に使えます。フォームにテキストを貼り付けて実行ボタンを押すだけで、スタイルガイドに準拠していない部分を一覧で表示できます。

何がチェックできる？

スタイルガイドに記載されている数多くの項目をチェックできますが、すべてをチェックできるわけではありません。たとえばスタイルガイドでは、「見出し」の文体は「常体または体言止め」にするとされています。本チェッカーではテキストのどの部分が見出しであるか判断できないため、チェックできません。チェックできない項目については本チェッカーのウェブサイトにまとめてあります。

また逆に、誤りではないのに検出（過検出）してしまうケースもあります。たとえば「まさしく」という言葉で、漢字の「正しく」ではなく、ひらがなの「まさしく」が適切であるとしているとします。このとき「ただしく」と読む「正しく」までを誤りとして検出してしまうことを指します。本チェッカーではできるだけ過検出が発生しないように工夫していますが、完璧ではありません。できることとできないことがある点に注意してご利用ください。

続きは WEB へ ▸▸▸

Lost in Translation Company

WRITER PROFILE

小山 浩二（こやま こうじ）

通訳・特許日英翻訳者。
1969 年オーストラリア生まれ。幼少期の 6 年間をロンドンで過ごす。
1994 年慶應義塾大学商学部を卒業。特許事務所で翻訳及び翻訳のチェッカーの仕事に従事した後、2012 年に独立。2014 年 3 月まで、日本ラグビー協会所属のトップリーグのラグビーチーム、クボタスピアーズの専属通訳をしながら機械分野の特許明細書の日英翻訳を行っていたが、4 月より特許明細書の日英翻訳に仕事を一本化。株式会社知財コーポレーション（旧株式会社知財翻訳研究所）の登録翻訳者。

MISSION STATEMENT

「翻訳会社の社員」とひとくちに言っても、翻訳から編集、チェックまで一人何役もこなす人もいれば、翻訳者としてスタートし、チェッカーを経て現在はコーディネーターという人もいます。あるいは、はじめからコーディネーターやプロジェクトマネージャとして採用された人も。

「フリーランス」ではない「翻訳会社勤務の人々」のキャリア、ワークスタイルはどのようなものなのでしょう。また彼らが、それぞれのキャリアを経て辿り着いた現在の立ち位置からは、どんな景色が見えているのでしょうか。

このコーナーでは、翻訳会社の社員の方に、これまでのキャリアを経て今みえてきた何か、リアルな日常、等々、「等身大の自分」を通して様々な本音の部分を自由に語っていただけるとよいな、と思っています。

翻訳料金と品質の狭間で―ある翻訳チェッカーの悩み

本稿では、「翻訳会社の社員」ではなく、特に「特許事務所の翻訳部門の社員」の仕事で苦労する点や特許翻訳の将来について皆さんに紹介したいと思います。

特許事務所は超多忙！

特許事務所の所員は、弁理士から事務職員に至るまで、みんな多忙な日々を送っています。特に、能力が高く顧客からの信頼が厚い弁理士の方は、「超」がつくほど忙しく仕事をしています。国内特許部門が忙しいと言うことは、その後パリルートや PCT といった、海外で特許出願するための翻訳の仕事が発生するということでもあります。私が担当していた特許明細書の英訳や翻訳原稿のチェッカーの仕事も忙しいものでした。

チェッカーにとって優秀な翻訳者は宝物！

チェッカーをしていたときは、限られた時間の中でいかに効率よく翻訳の質を上げていけるか、締切にどうやって原稿を間に合わせるかばかりを考えながら、ギリギリの時間配分で仕事をしていました。チェックをできるだけ短時間で効率的に行おうとしているときに質の良くない翻訳が納品されると大変なことになります。手直しにいったいどれくらいの時間が必要になるのか、そしてその締切りを守るために残業をあとどれだけ増やさなければならないか、恨めしげに予定表を睨めつけたりしてしまいます。時には手直しではなく、最初から翻訳し直す場合もあります。80 点の翻訳を 90 点に上げることはできても、60 点の翻訳を及第点の 80 点に上げるのは並大抵のことではありません。翻訳された方の気持ちや労力を考え、時間がかかっても翻訳文を修正していく、というようなことをしている余裕は全くなく、ひたすら締切りに間に合わせるために再翻訳をしていきます。

翻訳された英文明細書の質をどこまで求めるかについては、各社、各事務所でまちまちだと思います。クレーム（特許請求の範囲）はしっかりとチェックするものの、明細書は方式等のチェックのみで、英文や内容までは踏み込んでチェックをしない特許事務所もあるようです。私が勤務していた事務所は、チェッカーが全案件、全文チェックをした後、何人かがクレームだけのチェックを 2 重 3 重に行っていました。

私が翻訳に期待したのは、自分たちの顧客であるメーカーなどが求める翻訳水準を満たすことばかりでなく、その先の審査官、さらにその先の裁判官や競合他

社に通用する品質です。そのためには、優秀な翻訳者を安定的に確保することがとても重要になります。協力してもらっている翻訳会社の翻訳者が優秀だった場合、次回からその翻訳者に定期的に仕事をお願いしたいと、翻訳会社のコーディネーターにお願いすることもたびたびありました。優秀な翻訳者は、チェッカーにとって宝物のような存在です。その翻訳者の名前が表に記された翻訳原稿のチェックが回された時には、安堵と共にその翻訳者と、翻訳原稿を通してですが、お会いできたことに心の中で手を挙げて喜んでいました。

翻訳の単価と翻訳の品質について

さて、特許翻訳の単価の下落していることについてですが、私が勤めていた特許事務所にも安い翻訳単価を売りにしている翻訳会社が次々と営業をしてきました。単価の安さに惹かれて何社かに仕事を依頼したことがありましたが、残念ながら単価以上の翻訳が納品されることはありませんでした。先程の再翻訳しなければならなかった案件のほとんどがこのような会社に依頼した案件でした。翻訳単価の安さもさることながら、日本語明細書の翻訳経験が豊富な外国人のネイティブが翻訳することを売り文句に営業してきた会社もありました。しかし、日本語の表面的な言葉に引きずられてしまったり、技術内容を十分に理解して翻訳できていなかったりと、英文は流暢ながら内容に少し難があるものが多くありました。優秀なネイティブの特許翻訳者は翻訳市場に多くいらっしゃると思いますが、安い単価でお願いした会社からは単価に見合うものしか納品されませんでした。

私が勤めていた特許事務所では、顧客であり特許の出願人であるメーカーが、日本語の特許明細書の評価（フィードバック）ばかりでなく、日本語の特許明細書を翻訳した英文の特許明細書の評価（フィードバック）も定期的に行っていました。日本語の明細書の質は良いのに、英文明細書の質が悪い、と評価されてしまっては、本業である国内特許関連の仕事に影響を及ぼしかねません。海外出願が重要視されてきている中、そして出願人が特許出願の選択や絞り込みを行い、本当に使える国際特許出願をする傾向が出てきている中、翻訳原稿である英文特許明細書は日本語の特許明細書と肩を並べるくらい重要になってきています。

翻訳の質を上げるには、チェックの基準を厳しくしたり、翻訳ガイドラインをより詳細にして、どの翻訳者でもある一定の水準の翻訳ができるような仕組みづくりなどをする等の方法がありますが、結局のところ、翻訳者の質が鍵となります。実力のある翻訳者にはそれ相応の対価を払うようにした特許事務所の話も最近耳にしました。今後は、優秀な翻訳者を確保して翻訳の質を上げていく特許事務所とそうではない特許事務所とに二分化していくのではないか、と考えています。

翻訳単価が下がり続けることで、翻訳者の卵が特許翻訳に魅力を感じなくなったり、優秀な特許翻訳者が他の分野に移ってしまうのではないかと危惧を覚えます。

一方で翻訳者も、ただ和文原稿を表面的に翻訳するばかりでなく、より強い、できるだけ権利範囲の広くなる付加価値のある翻訳をする必要があるのではないかと思っています。また、和文原稿をそのまま翻訳するだけでなく、和文の明細書に誤記や内容的な矛盾などがある場合は、それを適切に修正した上で翻訳コメントを残すよう心がけることも大切です（ミラー翻訳を求められる PCT 国際出願などでは、修正はせず翻訳コメントを残す形になります）。

特許訴訟で勝てる強い特許がいつにも増して求められてきている中、企業や特許事務所などが、そこそこの質の翻訳を安い単価で発注するのではなく、質の高い翻訳を妥当な単価で発注する方向へと変わっていき、今後は、上記のような付加価値を翻訳に与えていくことができる優秀な翻訳者がより求められてくるのではないかと思っています。特許翻訳は日本の競争力を支える重要な仕事です。優秀な翻訳者にとって、さらに魅力のある仕事となることを願っています。

OWNER PROFILE

矢野 直子

PFU ソフトウェア（株）のドキュメント制作部門に所属。テクニカルライタを経て現在は社内翻訳者兼チェッカー。IT 系ドキュメントの英日翻訳と、機械翻訳の活用に関する調査を担当。「ほんやく互学会」メンバー。石川県在住。

■PFU ソフトウェア（株）
ソフトウェア開発／
マニュアル制作・翻訳（ローカライズ）
http://www.pfu.fujitsu.com/psw/

フリースタイル、翻訳ライフ

WRITER PROFILE

セランド修子（なおこ）

会議通訳・翻訳家。2012 年に約 25 年ぶりに米国より帰国。その後主にデポジションを中心とする訴訟通訳、法律翻訳、医療機器通訳、治験関連通訳を行っている。自作小説の博士論文で、ニューヨーク州立大学より文学博士号取得。翻訳として「Web は宝の山」（日経 BP 社）の共同翻訳がある。小説家としては、2009 年に「文學界」新人賞二次選考通過。その後も応募を続けている他、米国文芸雑誌にも短編小説が掲載されている。夫は詩人のエリック・セランド。夫エリック・セランド訳の小説 “The Guest Cat”（平出隆著。原題「猫の客」河出文庫刊）は、2 月 16 日週のニューヨークタイムズベストセラー 16 位となった。

■連絡先：nselland@sellandtrans.com

MISSION STATEMENT

意外と知られていないフリーランス翻訳者の「リアルなライフスタイル」。仕事のしかたや生活時間帯は言うまでもなく、趣味やストレス解消法にいたるまで千差万別です。そんなフリーランス翻訳者の「生の姿」を語ってもらったらおもしろいに違いない ―― そう思って始めたこのコーナーも開始からちょうど 1 年。6 人の翻訳者の方にそれぞれの「フリースタイル、翻訳ライフ」を語っていただきました。

今年度も、どんなフリーランス生活が登場するか、引き続きご期待ください。

言語が与えてくれる本質への視点

高橋さんから、共に翻訳を生業としている国際結婚の夫婦は珍しいので、二人の仕事ぶりを文章にして欲しいとご依頼をいただきました。私どもの場合、加えて夫は現代詩をライフワークとしながら実務翻訳で生計を立て、私は小説や短歌を書きながら会議通訳をしておりますため、そのことも珍しい点であるかと思います。

夫婦で文学を日常の思考の中心としているという点を外しては、私どもの生活を語ることは難しいように感じます。本ジャーナルの前号で翻訳ライフについて書かれた鈴木立哉さんが「『フリーランス翻訳』とは自分の生活と密接不可分な、言い換えれば『生きること』に他ならない存在」と書いておられますが、私どもにとっては文学と翻訳とが切っても切り離せない関係にあり、まさに「生きること」とも密接不可分にあると言ってよいでしょう。

夫の一日ですが、六時に起きて先ずゴミの分別をし、次に糖尿病から盲目になった老犬に餌を与え、インスリン投与をすることから始まります。私は通訳に出る時はばたばたと準備をして出かけますし、通訳業務がない場合は、八時ごろまで寝ております。（時折思い出したように五時起きしてランニングすることはあります。）その後夫はシャワーを浴びてヨガをし、日英字新聞両方にじっくりと目を通しております。新聞については紙ベースです。日英時事表現の比較と重要記事に目を通す作業が短時間でできるためです。また私の場合、大使館でのデポジション通訳が多い中、携帯電話を持ち込めない環境でも紙なら休憩時間に目を通せるという利点があります。

通訳がない日に夫の生活を観察しておりますと、九時頃から生業の翻訳を始めております。大抵の翻訳家の方同様、何時までに何ワードとノルマを決め、それに従っているようですが、私の仕事のやり方と違うのは、彼は数時間たってそのノルマに達すると、おもむろに哲学書を開くという点です。私の場合は、いつ通訳業務が入ってくるか分からないため、ノルマに達してもひたすら翻訳を続け、納期を前倒しします。そして次に来た仕事をぎゅうぎゅう入れています。夫の場合、プライオリティは哲学的詩的生活にあるのは明らかです。結果的に彼は、一週間で恐らく五冊を下らない哲学書や詩に目を通し得ているのではないでしょうか。しかしこの優雅な生活も、今年に入ってから、とあるシンクタンクでのオンサイトの翻訳のために、月の半分は通勤しているため変わって来ております。それでも仕事が終わりますと、喫茶店に寄って、本を読んでは何やら書き物をしているそうです。

ただこうして身につけている、現代詩をベースとする日本語習得により、時に抽象的な技術者の日本語も彼は容易に理解できるようです。『現代詩手帖』に数年前に書いた随筆で夫は「英語の文法と構文を限定されたスチール写真に例えるなら、主語が曖昧で動詞が最後に来て、センテンスの意味を本来的に最後まで確定できない日本語は、イメージが絶えず動いて変化している映画のようなものだ」という意味のことを書いています。この日本語の流動性の面白さを夫は詩人として翻訳家として、こよなく愛している様子です。特に夫が最も敬愛する、日本現代詩のパブロ・ピカソ的存在の吉岡実氏の作品は、長い一文の背後に、顔は出さないけれど明らかに存在しているらしい主語が複数あり、それが詩を難解かつ流動的なものにしております。長くなるので引用しませんが、興味のある方は「吉岡実詩集」の「静物」をお読みください。

主語がどれであるか、そして、どのような作用を詩にもたらしているかは日本語話者でなくては分からず、そういった点を夫は私に聞いてきます。私はと言うと、今日の証人のこういう言い方は、英語では最も自然にどう表現したら良いかなどということを、帰宅してひたすらしつこく聞いております。また、2008 年に日本への帰国を目の前にして再開した小説の博士論文とともに 100 冊の文学書を読まなくてはならなかった時は、ヘーゲル、ハイデガー、ヴァルター・ベニヤミンといった彼の図書コレクションと、何よりその知識が大きな助けとなりました。

夫がそのように言語との深い関係を維持している一方で、会議通訳を通した私と言語との関係は多分にゲーム的な、あるいは体育系的な要素があるように思えます。議題として製薬、医療から物理、法律理論に至るまで、自分で口にしていても時に意味が不明な複雑なスピーチを、弾丸のように訳して行く作業に私は短距離走者が恐らく感じているであろう、鳥のような至福の高まりを感じることがあります。同時通訳とは、知力とともに脳の筋力が要求される、体育的な要素が多くあるかと思います。

今年の 6 月 21 日～ 22 日に東京ビッグサイトで第 25 回日英英日国際翻訳会議（http://ijet.jat.org/ja/）が予定されておりますが、私はその実行委員として通訳セッション他の調整を務めさせていただいております。お仕事でご一緒させていただいた著名な先生とこのような形で再会できますことは嬉しい限りです。時折日本語ネイティブ委員と英語ネイティブ委員との間で、考え方の違いが顕著になる時、夫にそれを言うと例えば加藤周一の「日本文化における時間と空間」を引っ張り出してきてポンと目の前に置きます。この本の「大勢順応の貫徹と内面化」が現状解析の大きな手掛かりとなりました。

翻訳家として、表層的な人間間の相違よりも、言葉あるいは言霊に主眼を置いていると、本質が少し見えてくるような気がします。もう一人の翻訳家との夫婦生活はその軸からぶれない、導きをしてくれているようです。

OWNER PROFILE

高橋 聡

CG 以前の特撮と帽子をこよなく愛する実務翻訳者。翻訳学校講師。学習塾講師と雑多翻訳の二足のわらじ生活を約 10 年、ローカライズ系翻訳会社の社内翻訳者生活を約 8 年経たのち、2007 年にフリーランスに。現在は IT・テクニカル文書全般の翻訳を手がけつつ、翻訳学校や各種 SNS の翻訳者コミュニティに出没。

■ブログ「禿頭帽子屋の独語妄言」
http://baldhatter.txt-nifty.com/trados/

人間翻訳者の仕事部屋

WRITER PROFILE

伊豆原 弓（いずはら ゆみ）

1966 年横浜生まれ。幼少期は神戸、西宮、都内各所を転々とし、10 歳で横浜に帰る。中学生のときに翻訳家になりたいと思い立ち、高校時代から翻訳の勉強を始める。上智大学文学部英文学科在学中にいくつか翻訳のアルバイトを経験し、卒業と同時に翻訳会社で出来高制の専属翻訳者として働く。このときの上司がのちの経済翻訳家・故山岡洋一氏で、数人の新人翻訳者とともに、徒弟制度さながらに厳しい翻訳修業を積む。1991 年に独立し、IT 専門へ転向。1995 年頃から、主にテクノロジー、ビジネス、ノンフィクションの出版翻訳を手がける。主な訳書は『イノベーションのジレンマ』（翔泳社）、『奇跡の生還へ導く人』（新潮社）、『熊とワルツを』（日経 BP）、『コンサルタントの道具箱』（日経 BP）など。

■Twitter：@yummyz
■訳書リスト：
http://astore.amazon.co.jp/yizuhara-22

MISSION STATEMENT

フリーランス翻訳者になり 13 年目に入りました。最初の 10 年はがむしゃらに走ってきました。10 年後、20 年後の翻訳者としてのキャリアを模索し、いろいろな方のお話を伺ってきました。向こう 10 年、20 年、30 年の翻訳者としてのキャリアプラン、ライフプランを立てる上で、業界で活躍されている翻訳者の方々のお仕事ぶりを拝見したい、と思い、このコーナーでは、2000 字、翻訳、というお題に対して映し出される「人間翻訳者」の方々の「仕事部屋」を拝見したいと思います。皆さん方の「機械翻訳」に負けない「人間翻訳者」としてのキャリアの一助となれば幸いです。

校正刷りの山の中から

「先生」と呼ばれるのがきらいな人だったし、私もそう呼んだことはないので、山岡先生とは言わない。2011 年に亡くなった山岡洋一さんからは、OJT でみっちり翻訳のノウハウと金融・経済の知識を仕込まれた。ただ、それは 20 代前半の 3、4 年の話で、教わった仕事のほとんどは実務翻訳である。お互い出版翻訳を本格的に手がけるようになった頃には別々の道へ進んでいたので、書籍の翻訳ではあまりご一緒していない。もちろん、勉強会に参加したり、仕事を紹介していただいたり、当時私の専門だった IT 寄りの本を一緒に訳したりと、お世話になる機会はあったが。

初めてひとりで訳した本は、1995 年の『Power Mac 完全ガイド』という技術書だった。「実機チェックをしたいけれど、手元に Mac がないんです」と電話で話したら、「買いなさいよ。それぐらいの投資しなくて、どうするの」と一喝。それもそうだなと秋葉原に出向き、たしか 27 万円ぐらいで初代 PowerMac 6100 を買ったが、さらにお金をかけて拡張しないと快適に使えないことがわかり、結局、本が出たあとはほとんど使わなかった。かれこれ 15 年は電源も入れていないが、いまだに処分できずにいる。

出版翻訳の実務翻訳と大きく異なる点のひとつは、翻訳作業以外にも翻訳者がかかわる工程があることだ。翻訳が終わって原稿を送ったら、つぎに著者校正が待っている。以前は、初校ゲラがあがってくるまで何週間か時間がかかったので、次の仕事が差し迫った状況でなければ、しばらくのんびり過ごして疲れをとり、リフレッシュした頭で初校を読むことができたのだが、最近は印刷技術が向上したのか、一息つく間もなくゲラが送られてくる。脱稿直前に体中を巡っていたアドレナリンが鎮静化しないうちに、ふたたび原稿と向き合わなければならない。

山岡さんはほとんど校正刷りを見ない人だった。もう何十回も見直したものを、いまさら見る必要はないというのだ。翻訳中の山岡さんの集中力とスピードはよく知っているので、もっともなことだとは思う。そこで、お手伝いした本などは、印刷工程でミスが起きていないかといったことだけ私が見直した。ほとんど直しはなく、作業は一日で終わる。

自分で訳す本は、なかなかそうはいかない。早めに仕上げ、しばらく寝かせて納品前にもう 2、3 度見直したいと思うのだが、結局、そこまでの余裕はない。赤

字は最小限にするつもりでいるが、「なんじゃこりゃ」と言いたくなる間違いを見つけてしまう。時がたって見直してみると、ところどころぽっかりと集中力が途切れていたのがわかる部分がある。

著者校正の苦しさはそれだけではない。この工程は編集者との共同作業である。翻訳者と同じように、編集者にもいろいろな人がいる。原稿をほとんどそのまま印刷に回してしまう人もいれば、びっしりコメントを入れてくる人もいる。「ここのつながりが少しわかりにくいです」などと意見や提案を書き添えてくれる人もいれば、自分で赤を入れて「確認してください」と送ってくるだけの人もいる。「てにをは程度なのでこちらで直しておきました」と言われ、「ちょっと待った！」となったこともある。編集のプロだから著作権のことはよく知っているかというと、実はそれも人それぞれである。翻訳者は、みずから著作権者としての権利と責任をわきまえて必要な押し引きをしなければならない。

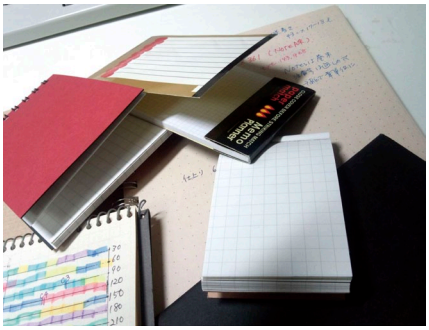
編集者にも翻訳者にも仕事に対する自負がある。それはぶつかり合うべきものではなく、良い本をつくるという同じ目標に向けて協調すべきものだ。編集者のコメントには、自分では気づかない「なるほど」と思う指摘がたくさんある。それでも中には、「あれ？ この直しはおかしい」と思うところもある。そういうときにいちいちムッとしていたら先へ進まないし、ほかのところまで色眼鏡で見てしまうことになる。そういうときは、自分の訳文の何が勘違いを誘ったのだろうと考え、その文全体を見直して再修正を入れる。

意外に引っかかるのが、「どちらでもいい」修正である。ここは直しても直さなくても同じだけどなぁ、と思うところを直されることがある。そういうときは、「ま、いいか」と言って編集者の提案に従う。どちらでもいいと思ったら、自分が引いた方がスムーズだ。

こうしてフィードバックのボールを投げ合う作業は、コミュニケーションに不慣れな翻訳者にとって神経を使う部分でもあるが、編集者との相性が良ければ、とても楽しい部分でもある。そう、当然といえば当然だが、編集者と翻訳者には相性がある。この点では、私は今まで恵まれてきた方だと思う。

ちょうど先週、春に出る本の初校を確認し終えたところだ。今週には再校ゲラが届くと思うが、ここまでくれば読者になったつもりでさらっと一度読むだけだ。この後工程が楽しめるようになってきたのは、年を取ったせいかな、などと思う。

小さなこだわりグッズは付箋。会社ではあまり使わないような色を選んで楽しむ。



方眼罫の小さなメモ帳やノートが好き。これに進捗を書き込むのが長年の習慣。

OWNER PROFILE

矢能 千秋（やのう ちあき）

University of Redlands 卒。サイマル・アカデミー翻訳者養成コース本科（日英）修了。NPO えむ・えむ国際交流協会（代表：村松 増美）事務局を経て、現在フリーランス 13 年目、JAT 会員 9 年目。JAT ではアンソロジー委員会、SNS 管理委員会、ウェブサイト・コンテンツ委員会に所属。NES とペアを組み、スピーチ、ウェブコンテンツ、印刷物、鉄道、環境分野における日英翻訳に従事。2012 年よりサン・フレアアカデミーにてオープンスクール講師も務める。

■Twitter：@ChiakiYano
■ブログ：http://chiakiyano.blog.so-net.ne.jp/
■http://jat.org/translators/4596

翻訳横丁の表通り

WRITER PROFILE

長尾 龍介（ながお りょうすけ）

フリーランス英日・日英デジタルゲーム翻訳者。家庭用ゲーム機やモバイル機器用ゲームの英日翻訳にほぼ専業。得意とするジャンルはミリタリー系、SF 系、ファンタジー系。最近の翻訳従事タイトルは『ぷにぷにパニック』『ヘイ・デイ』『クラッシュ・オブ・クラン』『ねじ巻きナイト』『ディズニー エピックミッキー 2：二つの力』など。

MISSION STATEMENT

「翻訳横丁の表通り」には色々な人々が往来するようになりました。

このコーナーでは、翻訳者さん達に「翻訳横丁の表通り」に出店して頂き、自身が持つ翻訳への「こだわり」を記事にして頂きます。「想い」であったり「ツール」であったり、「翻訳方法」であったり「将来の夢」であったり、何が飛び出るかは執筆者の翻訳への「こだわり」次第。ちょっと立ち寄って、覗いていきませんか？

付加価値としての訳注のススメ

はじめに

以下は筆者が日頃従事している英日デジタルゲーム翻訳における考察と提言ですが、日英ゲーム翻訳をはじめ、他の翻訳ジャンルにも該当しうるものと考えます。現役の翻訳者の皆さん、ゲーム翻訳を視野に入れて勉強中の皆さん、ゲーム翻訳市場に参入済みの翻訳会社さんのそれぞれにとって、何らかのご参考になれば幸いです。

なお、ここでいう「訳注」とは出版物や製品における脚注的内容（フットノート、すなわち製品提供側からユーザーへのメッセージ）ではなく、翻訳者が翻訳成果物に併記／添付し、その納品後に後作業担当者（コーディネーター、チェッカー、リライター、言語テスターなど）が目にすることになる翻訳者コメントのことです。

訳注、書いていますか？

皆さんは日頃の翻訳の実務や学習に際し、訳注をどれほど書いていますか？

筆者は重箱の隅をつつくような訳注をついつい多めに書いてしまう性格でして、おそらくそれゆえにクライアントさんから見るとクセのある翻訳者となってしまっているかと存じます。しかし同時に、訳注を付加価値としてアピールすることで現在おつきあいのあるお客さんとの関係、および、新規開拓の両面において、同業との棲み分けの一助や突破口にできている手応えがあります。

今回はこの場をお借りして、英日デジタルゲーム翻訳業（以下「ゲーム翻訳」）における訳注の現状での役割と重要性、および、訳注が翻訳成果物の付加価値たりえるかどうかを掘り下げてみようと思います。翻訳者各々の性格や翻訳のスタイル、仕事の受注形態などによって訳注を書けるかどうか、書くべきかどうか、書く場合の適正量などは変わるかと思いますが、ステップアップやブレイクスルーのヒントになればと思います。

ゲーム翻訳の訳注とは

2014 年 1 月現在、ゲーム翻訳の訳出作業の典型例は、翻訳素材のみが Excel 形式のファイルとして提供され、ト書き情報が極めて少ない（もしくは皆無な）状態にて、会話文・説明文・システムメッセージなどが（しばしば順不同に）一緒くたになったゲームテキストを訳していくというものです。プラットホームとなる機種の実機や原語版のプレイ可能なバージョンが翻訳者に資料として貸与・提

供されることは滅多になく、登場人物やストーリー展開に関する資料などが開示される案件も決して多くはありません。そのため、確度の低い判断や想定、および、それらのリスクを軽減するために翻訳の間口を広くする工夫などが非常に多くなるのが、実質的な業界標準となっているように思えます。

また、ゲームのローカライズには文化的な要配慮事項や、ユーザーエクスペリエンス面での工夫が伴うため、万人が納得するような正解を定義するのが難しく、案件やクライアント、翻訳者によって方向性が十人十色となるのが半ば当たり前になっています。

それゆえ、文脈情報不足などにより確度が低い判断や想定しかできない箇所については限られた時間内で必要なリサーチを行い、自分の経験と勘を駆使したベストエフォートでの訳文を提出せざるを得ません。ゲーム翻訳者同士の競争はすなわち、現状では「どれだけ素早く正確に正解を提出できるか」ではなく「他の翻訳者よりも、どれだけユーザー視点で適切・魅力的な訳文を出せるか　および／または　どれほどミスが少なく、クライアントが活用・修正しやすい下訳を出せるか」の勝負となっている印象です。そしてさらに事態をややこしくするのが、同一翻訳者が担当する同一案件の同一ファイル内でも、そのようなベストエフォート的判断の確度が個々の翻訳対象箇所によって大きく上下してしまう点です。

訳文そのものにはパラメータとしての翻訳確度を含めることはできませんので、最も不安度の高い／確度の低い箇所を中心に、訳注にて後作業担当者に不安の内容やアレンジの論拠と説明、原語版実機や訳文実装後の翻訳版での要確認事項などを申し送り、対象箇所の重視・注目・確認を促すのがゲーム翻訳の実務における通例となっています。リスクが相対的に高い箇所をピックアップして報告しておけばそれらの箇所を優先的に確認・検討してもらえるため、クオリティの底上げが効率よく行なえるわけです。

また、訳文を読んだだけではわかりにくい翻訳者側の配慮・判断・アレンジなどについて意図をあらかじめ説明しておくことで、その意図が汲み取られずに訳文が改悪されてしまったり、アレンジによって迂回を試みた問題が再発してしまったりするリスクを減らすこともできます。訳注なしでは一見、誤訳ともとられかねないアレンジでも、実際は翻訳者による苦肉の策である場合も少なくなく、必要十分な訳注を付記することでそのようなアレンジの意図が後作業担当者にも伝わりやすくなるわけです。

英日ゲーム翻訳における訳注の現状と問題点、そして翻訳会社・翻訳者への提言

2014 年 1 月現在、筆者の視野内での英日ゲーム翻訳に限って言えば、業界の標準として翻訳者サイドでも翻訳会社サイドでも訳注が活かしきれていない印象を受けます。これは個人的には非常にもったいない状況だと感じています。

中でも筆者が最ももったいなく感じるのが、各社によるゲーム翻訳トライアルの出題形式です。多くの翻訳会社さんが訳注欄を設けていないファイルをトライアル問題として提示し、回答に際した指示事項にも訳注の記載先や提出方法を明示していないように見受けられます。ゲーム翻訳の実作業では訳注を書く必要性が総じて強いため、回答者に実案件に近い形でのアウトプットを求めるのであれば、訳注をできるだけ書かせるように仕向けるのがベターに思えます。

続きは WEB へ ▸▸▸

OWNER PROFILE

齊藤 貴昭

電子機器メーカーにて開発／製造から市場までの品質管理に長年従事。5 年間の米国赴任から帰国後、社内通訳・翻訳者を 6 年間経験。2007 年から翻訳コーディネータ兼翻訳者として従事。「翻訳者 SNS コーディネータ」として業界活動に精を出す。ポタリングが趣味。甘いもの好き。Twitter や Blog「翻訳横丁の裏路地」にて翻訳に関する情報発信をしています。

■Twitter：terrysaito
■Blog：http://terrysaito.com

WordSmyth Café

WRITER PROFILE

小林 紀元（こばやし のりもと）

始めまして。小林紀元と申します。年齢は 69 歳、山梨県出身です。大学でフランス語・フランス文学科を専攻。卒業後、電機メーカーに就職しました。輸出部に配属され、3 年ほど東京で勤務した後、その会社の海外子会社に出向となり、オランダ、イタリアで、それぞれ 8 年間、5 年間の計 13 年間海外勤務をしました。
東京本社に戻り 19 年間、翻訳事業に従事。この事業の中には通訳の派遣も含まれます。退職した現在は、翻訳の仕事とは関係ない生活をしています。退職後、農業関係の大学の成人学校に 2 年通い、農業一般と果樹栽培コースを取りました。今は、成人学校の仲間が持っている農園で、仲間と一緒に農作業をしております。それと平行して、某大学の成人学校に週 2 回通うという生活です。また、時間が許すかぎり、英語、フランス語、イタリア語、オランダ語の小説を翻訳して、外国語の知識レベルを保ちながら小説を楽しんでいます。

MISSION STATEMENT

当コーナーは、翻訳に関わるさまざまの人々が集う「誌上カフェ」です。WordSmyth Café では、毎号異なる執筆者にご登場願い、各人の「こだわりアイテム」を切り口に、信条、仕事、趣味、ライフスタイルなど硬軟取り混ぜたテーマを取り上げます。テーマは毎回変わり、一人ひとりのこだわりや、関心の対象がよく分かるアイテムを選んでいただきます。3-4 月号では、翻訳・通訳業界で長い経験をお持ちの小林紀元さんに、業界の問題点、特に翻訳者・通訳者の社会的評価について語っていただきます。

翻訳・通訳の社会的評価について思うこと

今回は、今まで仕事と深い関係があった翻訳や通訳が果たしている役割、翻訳や通訳者の社会的評価などについて今まで考えて来たことについて触れてみようと思います。

翻訳に関心を抱くことになった経緯

オランダとイタリアで駐在期間、色々な言語体験をいたしました。その中で一番記憶に残っているのは、1972 年ごろ、当時、中東のスイスと呼ばれたレバノン・ベイルートに出張したときのことです。代理店の社長が、我々とは英語で商談。運転手にはアラビア語、秘書にはフランス語を全く問題なく話しているのを見たり、松林の中で若い恋人同士が交わす会話で、英語、アラビア語、フランス語を状況に応じて使い分ける情景を目にして、心底から羨ましいと思いました。確かに、英語は世界中で一番大事な言葉であるけれども、英語以外にも色々な言語が使われていて、外国人と意思疎通を良くするためには、英語のみならず他の言語もできた方が良く、相手の使う母語も理解できることが必要であることを感じました。それで、私は、色々な言語を同時に習得するための努力と工夫をした結果、日本で習った英語とフランス語に加えて、イタリア語、オランダ語ができるようになりました。

帰国後、本社で通常の社員がする仕事をする一方で、オランダやイタリアで身に着けた知識や語学を生かす道がないか、それには、翻訳という仕事が適しているのではないかと思い始めたのです。会社に勤務しながら、二つの翻訳会社に翻訳者としての登録を受け、主に和訳の仕事で、英語、フランス語、イタリア語、オランダ語の文書を訳しました。最初の仕事が、1800 年代にオランダの技術者を招聘して実施された九州の有明海の治水工事の記録の和訳でした。この時代のオランダ語の翻訳を辞書やオランダの知人の助けを借りて翻訳しました。普通の生活をしたら触れ合うことが出来ない文書を読むという素晴らしい経験をすることができたのです。この翻訳の仕事が大変面白くて、会社を辞めて独立しようと思いましたが、色々と調べると翻訳者として独立することは、思うほど容易なことではないと悟りました。その時、たまたま、会社から社内起業ベンチャーのアイディア募集があったので、会社とそのグループ会社を対象にする翻訳事業のビジネスプランを作って応募して認められました。私は、依頼される書類を翻訳したかったのですが、言葉に堪能であること以外に、専門分野が必要とされます。限られた分野では可能でしたが、総ての分野にわたって依頼される書類の内容を理解したり、外国の市場で受け入れられる文章スタイルに仕上げたりすることは無理なので、顧客と翻訳者のコーディネートをするエージェントの役割をしました。

1990 年に事業を始め、それから 2009 年の退職時まで従事しました。この事業は、私が退職した後も継続しています。

翻訳・通訳者の役割と社会的な評価

翻訳や通訳の業務に関わって来た中で特に感じた翻訳・通訳者の役割と社会的な評価について述べます。

翻訳や通訳の役割は、情報、文化、技術などを自国以外の世界に知らせたり、他の国から自国に紹介するときに必要なことは誰でも認めることです。たとえば、日本の小説家がノーベル文学賞の栄誉に浴すような場合、その内容を理解させる尽力をするのは翻訳者なのです。会議や商談が首尾よく進行するためには、通訳の存在を欠かすことはできません。

しかし、ハリーポッターの翻訳者松岡佑子さんが翻訳者に選ばれるまでの苦労話で有名になりましたが、そのような例は稀で、翻訳者の名前が脚光を浴びることはあまり多くありません。難解な文章を書く作家の小説を誰がどのようにどんな苦労をして、海外に紹介したかは、普通人は殆ど知りません。また、通訳者も、日本人と外国人の間の会話をどんなに素晴らしい通訳をしたとしても、最初の謝意は、知識を持ってはいるが、外国語が苦手な話者に述べられ、通訳者への感謝は二の次になるでしょう。両方とも、上手く行って当たり前なのです。翻訳者や通訳者は、仕事を継続して貰うために、依頼内容の理解のための努力、誤訳や抜けがないように細心の注意、依頼者から与えられた時間内に仕事を終える努力をしているのです。また、作業が中断しないための健康管理、一定以上の収入を確保するために時には掛け持ちで仕事をするなどという大変な知力、労力、気力を使っている職業人なのです。このように大変な職業であるにも拘わらず、その大事さと労力が正しく評価されていないのではないでしょうか。私は、翻訳や通訳の仕事は大変重要な役割を果たしているにも拘わらず、それに見合った評価を得られない理由を次の 4 つに分けて考えて見ました。

1. 労力と報酬の関係

オリジナルティが大事にされる本の著者達には、著作権が守られ、著作物の売れ行きにより収入が確保されます。翻訳の場合は、翻訳者が個人的に著作者と交渉する場合もありますが、大部分の場合は、出版元が著作者と翻訳権について取り決める契約にもとづいて翻訳者が選択され、翻訳者は訳した本の売れ行きに基づいて収入を得ます。

翻訳需要で一番大きい産業翻訳の分野では、著作権、翻訳権、翻案権などは、殆どの場合、翻訳者、翻訳者と依頼者の間に立つエージェントも放棄するようになっています。一旦、成果物を納入すれば、その分の報酬の支払いによってその仕事は終決。翻訳成果物が関連する商品やサービスの売れ行きにどのような効果を持ったかに関係することはありません。

2. 翻訳者・通訳者の仕事の仕方

翻訳者・通訳者は、個人的な営業活動をすることが難しいので、顧客と翻訳者・通訳者との間を仲介するエージェントから仕事をもらい、自分は翻訳・通訳の仕事に精力を集中します。それゆえに、翻訳者や通訳者は自分達と関連がある会社等の組織か翻訳・通訳エージェントと関連を持つ場合が殆どで、翻訳者・通訳者間の横の連絡が極めて少ないと云えます。しかし、この状況は、このところ大きな変化を遂げているようです。著しく進化している IT 環境下で、翻訳・通訳者達の間で SNS や Twitter を利用したコミュニケーションが盛んになっていると聞きました。

業界分析の続きは Web 版でご覧ください（リンク）。▸▸▸

OWNER PROFILE

遠田 和子

日英翻訳の傍ら翻訳学校での講師、またプレゼン・ディベート研修の講師をしています。著書に、「英語なるほどライティング」、「Google 英文ライティング」、「e リーディング英語学習法」（すべて講談社）があります。趣味の一つは読書で、最近はキンドルで電子書籍を読むことが多くなりました。映画・旅行も好きです。英語スピーチの練習と、バレエのレッスンを続けています。それぞれ少しでも上手くなるため、地道に努力しています。

■Website：WordSmyth 英語ラボ
http://www.wordsmyth.jp
■Facebook Page：WordSmyth
http://www.facebook.com/wordsmythlab
■e-reading ブログ：One Chapter Reading Club
http://minamimuki.com/fun-and-free

IJET-25

（英日・日英翻訳国際会議 東京大会）

IJET がついに東京で開催！

2014 年 6 月 21 日（土）～22 日（日）東京ビッグサイトにて

早期割引申込み受付中！（早期割引は 4/10 まで）

— 基調講演 —

村岡花子－『赤毛のアン』翻訳に託した未来への希望

講演者：作家 村岡恵理さん

2008 年、『赤毛のアン』の原作誕生 100 年の年に、著書『アンのゆりかご 村岡花子の生涯』を上梓。本著が、2014 年前期の NHK 連続テレビ小説「花子とアン」の原案となる。

— メインセッション —

50 以上の多種多様なセッションをお届け。通訳翻訳のテーマパークです！

『ダ・ヴィンチ・コード』やエラリー・クイーン新訳ででおなじみの翻訳家 **越前敏弥**氏の翻訳トーク

名著『**プロが教える 技術翻訳のスキル**』の **時國滋夫**氏、**高橋さきの**氏、**大光明宜孝**氏、**佐藤エミリー綾子**氏、**田中千鶴香**氏

『英米リーダーの英語』などの著作でも知られる会議通訳者 **鶴田知佳子**先生（東京外国語大）による逐次通訳の理論と実践の授業

『東京裁判における通訳』の **武田珂代子**先生（立教大）による、通訳史、通訳教授法の深い観点を踏まえた英日逐次ワークショップ

SDL Trados Studio などが当たるセッションも！

…… セッションのごく一部です。

— ネットワーキングディナー —

国内外から通訳者翻訳者が一同に介する、ネットワーキングに最高のチャンス！

JAT